

としよかん
だより

第111号

発行
茨城県立潮来高等学校
図書委員会

おめでとう!
読書感想文
茨城県コンクール入選

今年度は感想文が二点入選しました。入選者は次の通りです。感想文は4〜6ページに掲載しました。

第六十七回青少年読書感想文
全国コンクール茨城県高等学校の部
入選 一年B組 本澤 慧真
同 一年C組 輪湖 晴貴

委員会
の活動

県東地区生徒図書委員研修会
令和六年六月四日に行われた、「東地区生徒図書委員研修会」に本校代表として二年生二名が参加しまし

た。今年は清真学園高等学校での開催でした。

研修会に参加して

二年 大竹 康介

五、六時間目の授業をやらない代わりに読書会に参加できるということなので、参加してみました。大人数で交流するのは苦手ですが、あまりこのような機会はないので良い経験になりました。小説は読んだことがなく、文字ばかりで読もうとも思っただけでありませんでした。二週間ほどで全て読まないといけないので嫌だったのですが、毎日計画的に読みました。読み終わっても特に面白くはないと思いませんでしたが、読書会でみんなと本の内容について話してみると、「そういう見方もあったのか」と感じるがありました。多角的に物事を捉えられるようになる

と楽しく本を読めるのだなと思いましたが。また、このような機会を通して少し苦手なことでもやってみれば意外と楽しいのかもしれないと感じ、良い経験となりました。



二年 黒澤 瑛斗

僕は、初めて読書会に参加してその日に初めて会う人達と決められた本の感想や意見を交換したり、議論などをしました。読書会を行う前までは、初めて会う人達なのであまり会話が弾まないかと心配していましたが、進行を担当する人がうまく

回してくれたのでスムーズに意見の交換ができました。読書会を通して、自分とは違う意見をたくさん聞き、この回に参加する前よりも想像力が豊かになったと感じました。その他にも、本のことだけでなく、趣味などの話もできて面白かったです。



ブックエント

先生方に「おすすめの本」の紹介をしていただきました。

「心を整える」

長谷部 誠 著



校長 小澤 茂幸

この本では、サッカー日本代表元キャプテンの長谷部誠が、自身の経験をもとにした習慣やメンタリティについて紹介しています。

一般的に、メンタルなど精神面は鍛えて強くなるものだと思うがちで、心はよく「鍛える」とか「磨く」などと表現されます。しかし、著者は違います。心は鍛えたり磨いたりして強くなるのではなく「整える」ものだと主張します。心を整え、常に安定した状態でいれば、思い通りのパフォーマンスができ、何事にも動じないことができます。

す。イライラしなくなったり、小さなことで悩まなくなったり、心にとつての負担を減らすことができると思います。

そのために、生活のリズム・睡眠・食事・練習・日々の生活から、有害なことをしないように、少しでも心が乱れたら自分で整えるように、努めます。そのようにして安定した心を装備することで、いかなる試合でも、いかなる場面でも、精神が揺らぐことがなく、力を発揮できるようにになると説きます。

このことは、サッカー以外のスポーツでも、勉強でも、仕事でも、人生のあらゆる場面に当てはまりません。心がざわついてると集中できないし、活動の質も下がります。本書を読み進めると、日々の生活の中で心をきちんと整備しておくことが大切で、そのためには、身の回りを整理整頓するとか、一人の時間を大切にするとか、愚痴を言ったり言い訳をしたりしないとか、少しの心掛から始められることがあることに気付かされます。

「意識」と実際の「行動」とを結びつけるコツなど、今後、どのような人

生を歩むとしてもヒントになる新しい視点が得られる一冊です。ぜひ、読んでみてください。



「運転者」

喜多川 泰 著

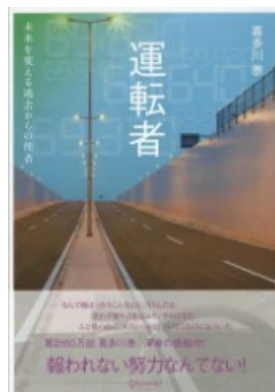


教頭 高山 雅子

人生のどん底で現れる一台のタクシー。それは、乗客の「運」を「転」ずるという摩訶不思議なタクシーで・・・

「運が劇的に変わる時、場というのが、人生にはあります。あなたにも。運はいいか悪いで表現するものじゃないんですよ。使う・貯めるで

表現するものなんです。先に貯めるがあつて、ある程度貯まったら使うができる。運は後払いです。何もしていないのにいいことが起こったりしないんです。周囲から運がいいと思われている人は、貯まったから使っただけです。」———本文より
最近どれもこれもうまくいかないな、と思ったら、手に取って読んでみてください。



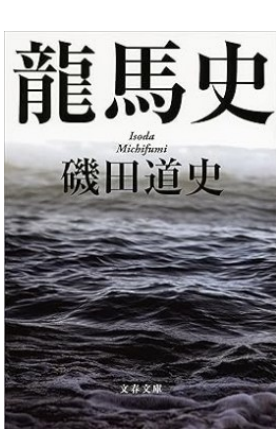
『龍馬史』

幾田 道史 著



加藤 颯太

坂本龍馬。誰もがその名前を聞いたことがあるのではないだろうか。江戸時代末期という、激動の時代に颯爽と現れ『日本をもう一度洗濯いたし申候』(日本を新しい近代国家に生まれ変わらせる)という想いで三十一年の生涯を太く短く生きた偉人です。皆さんも、「薩長同盟」の立役者として、聞いたことはあると思います。今年、私は龍馬が亡くなった年齢に追いついてしまいました。龍馬が駆け抜けた三十一年。私は、龍馬のように生きてこられたのだろうかと少し焦りを感じています。



が残した「手紙」にあったのです。龍馬は、勝海舟という江戸幕府の重鎮に認められ、弟子となります。このことを姉へ「エヘン、エヘン」と自慢する手紙が送っています。また寝ているところを刺客に襲われた時の話も手紙で「自分は運が強く、いくら死ぬような場所に行っても死なない」と楽観的に伝えていたようです。他にもユーモアあふれ、人を楽しませることが好きなのだろうと分かる手紙がいくつも紹介されています。しかし、そういった楽観的な性格、無防備さがあだとなったのか、定宿で暗殺されてしまいます。この本では、今なお謎に包まれた龍馬暗殺事件についても手紙などを通して言及されています。

最後に、この本を読んで、歴史をより身近に感じるきっかけになればと思います。歴史好きの人はぜひ読んでみてください。

『図書館戦争』

有川 浩 著



高野 深愛

『図書館戦争』は、未来の日本を舞台にしたディストピア小説です。政府が情報や書物を厳しく制限する世界で、言論の自由を守るべく戦う「図書隊」と、情報統制を行う「メディア不良化委員会」が対立しています。主人公の笠原郁は図書隊に入っただけの新人隊員で、彼女が直面するのは本を守るための戦いだけでなく、上司や仲間との関係、そして自分の信念を貫くための葛藤です。

この物語で特に注目すべきなのは郁と彼女の上司である堂上篤との関係です。最初は厳しい上司として登場する堂上ですが、郁との絆が深まるにつれて、お互いを支え合う存在になっていきます。恋愛要素も含まれており、物語の中で二人の関係が進展していく様子は、心温まる瞬間がたくさんあります。



さらに、この小説の大きなテーマの一つは「言論の自由」です。情報が制限される社会で、自由に考え、発信することができない恐怖が描かれており、その中で言論の自由を守るために戦う姿が描かれています。また、物語にはアクションや戦闘シーンも多く登場し、スリリングな展開が続きます。郁と仲間たちが本を守るために命がけで戦う姿は感動的で、ただのアクション小説ではなく、深いドラマを感じさせてくれます。

『図書館戦争』は、単なるアクションや恋愛だけでなく、自由の大切さや社会について考えさせてくれる一冊です。是非読んでみてください。

「いつやるか？今でしょ！〜今すぐできる45の自分改造術〜」

林修 著

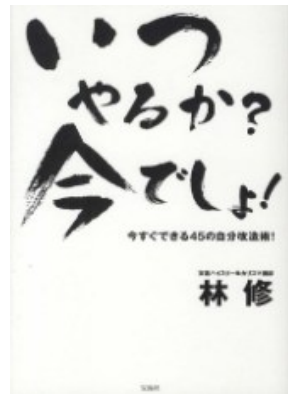


中野 晃樹

「いつやるか？今でしょ！」と、耳にしたことはあるでしょうか？知らない人もいるかもしれませんが、これは二〇一三年の流行語大賞にも選ばれた有名な言葉です。東進ハイスクール所属の林修さんによるもので、その当時は誰もがこのフレーズを口にしていました。この言葉が出て早くも十年以上が過ぎ、この言葉の裏には何が隠れているのかわかりたいと思いつつ、この本を読まないと私ですが、この本を手にとってみました。

普段誰もがしている挨拶は人と人を結ぶコミュニケーションです。当たり前ですが「誰にでも」することがポイントであることは誰でもわかるでしょう。私は無心で挨拶をしていましたが、挨拶は「世間が自分を認識する時間」であると気づかされました。誰にでも行うことは当然ですが、平等に行うことで真に礼儀正しい人間であると周囲に認められることができるようになりました。このことから挨拶の重要性を改めて感じました。また、質問の仕方についても学べました。普段皆さんはとりあえず分からないから質問してみよう、とは考えていませんか？著者曰く、質問とは「自分の考えの及ばない範囲を他人に考えさせ、その知恵を自己のものとする行為」というものだと思います。つまり、質問をした時に、相手に考えさせ、「こいつやるな！」と思わせる質問こそ真の質問であるそうです。質問の仕方一つで周りからの評価が上がるのは非常にコスパが良いと思います。皆さんも実践してみてもいいでしょうか？二つのことを挙げましたが、他にも多くのことが載っています。これか

ら社会に出る君たちにぴったりの一冊だと思えます。様々な考え方に触れて自らの知見を広めて新しい世界に挑戦してください。



読書感想文

「あの花が咲く丘でまた君と会えたら。」を読んで

本澤 慧真

私がこの本を選んだ理由は、SNSで「泣ける」と話題になっていたからです。また、この本の表紙には、百合の花を抱えた少女が空を見つめている絵が描かれています。私はどこか切ない雰囲気この絵に引き込まれそうになったのもこの本を選んだ理由の一つです。

この本の著者は、鹿児島県出身の汐見夏衛さんです。汐見さんは、高校の国語教師として働きながら休日に小説を執筆しています。また、ケイタイ小説サイト「野いちご」にも作品を投稿していて、二〇一六年に「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」で書籍化デビューを果たしています。この物語は、現代に生きる中学二年生の「百合」が主人公です。代わり映えのない、平穩すぎる毎日に、苛々して不満ばかりの百合はある日、進路をめぐって母親とぶつかり家出をします。そして近所の防空壕に逃げ込んだことがきっかけで戦時中の日本にタイムスリップする場面から始まります。百合がしばらく街をさまよっているうち、偶然通りかかった彰という青年に助けられ、軍の指定食堂に連れていかれます。そこで様々な人と出会い、日々を過ごすうち、百合は彰に何度も助けられ、と同時に彰の誠実さや優しさにどんどん惹かれていきます。しかし彰は特攻隊員。決して叶うことのない切ない恋の行方を描いた物語です。

この本を読んで心に残った場面があります。それは、彰たちに出撃命令が下された時、同期の板倉さんが逃げ出すという場面です。私は今まで、特攻隊員は、「お国のため」と言って、自分の命と引き換えに、敵を一撃を食らわせようとする、まるでテロリストのような存在だと思っていました。だから出撃命令が下された後、板倉さんはなぜ逃げ出したのか疑問に思っていました。私ははじめ、板倉さんが逃げ出した理由はいざ自分が出撃すると決まると怖くなったからだと思っていました。でも板倉さんは、妻が空襲によって足を不自由にして、また我が子の顔も見ないその矢先に、召集令状が届いたと語っていました。板倉さんには「愛する妻と子を残して死ねない」という気持ちがあったのです。確かに、現代に生きる私たちも板倉さんと同じ立場だったら、愛する家族、恋人がいるから死ねないと考えます。そう考えると現代に生きる私たちと当時の人たちの「生」への価値観はそう変わらないのだと気付きました。

また、私には、この本を読んで気になった場面があります。それは彰が敵艦に特攻する場面です。彰は出撃前に「天皇陛下の御為に、大日本帝国のために、国民のために、俺は敵艦を轟沈してみせます。」と語っているように、自分の命で敵艦を沈める覚悟をしていました。しかし、彰は最後の最後で、甲板にいた米兵を見て「君にも俺と同じように、大切な家族や、大切な人がいるんだろう。」と違って真つ青な海面に向かって突っ込みました。私は、百合がいくら特攻を辞めるように説得しても断固として逃げようとしなかった彰が、なぜ敵艦に突っ込まなかったのか気になりました。今ここで目の前の敵艦に突っ込むことで、国の勝利に貢献できます。しかし目の前の米兵の命、その米兵の大切な家族や愛する人を守ることはできません。彰自身にも百合という守りたい存在がいます。そう考えた時、米兵と百合の姿が重なったように感じたからふと我に返り、海に突っ込んだのではないかと考えます。彰は誠実で優しい性格です。だからこそ自分の命を犠牲にして、最後の最後まで目の

前の命を守る努力をしたのではないかと読み取ることができました。私は、最後まで読んでいくうち、この本のあとがきのページにこんな言葉が書いてあるのを見つけました。「ただ歴史上の出来事として『知る』だけではなく、今も消えない事実として『感じる』ことが重要である。」という言葉です。私はこの本を読み進めるうち、祖父から教えてもらった話を思い出しました。それは、僕の曾祖父が戦争を経験したという話です。確かに、家に飾ってある遺影に軍服を着た人が写っています。祖父から曾祖父の戦っていた戦場では食料に困って川底の藻をすくって食べたという話など教科書にも載っていないような色々な話も聞きました。今思えば、私は幼い頃から、戦争の出来事を今も消えない事実として感じるものが出来ていたのではないかと思います。

と常々思っています。だからこそ、絶対に起こしてはならない意識で生活していくことが、今の私にできる平和への一歩なのではないかはこの本を読んで思いました。

読んだ本
書名 『あの花が咲く丘でまた君と会えたら』
著者 汐見 夏衛

「十六歳とは…」
輪湖 晴貴

中学校を卒業してもう半年ほどが経った。高校生活も勉強だけではなく、部活動にバイトに新しいことだらけで、まだ自分の理想の高校生活になっていない。そんな時にこの本を薦められて読んでみることにした。

十三人の大人が、それぞれ十六歳の頃感じた気持ちを書いた内容で今の自分にはまだわからないことだらけだった。しかし、十六歳になった自分だからこそ、「これからこんなことがあるのか」、「こんな風を感じるのか」と思うこともあった。

親との関係は、たまに難しく感じることがある。自分のやりたいことや考え方、感じ方を否定されていると思うとイライラしてしまうことがある。この本の中にも親との距離感について書いているところがあつた。両親は、きっと自分のために言ってくれていることであつても、とてもうつつとおしく思ってしまうこともよくある。しかし親にとつても難しい時期なのだと言口聡一さんの話からわかつた。「『子どもたちの成長をできるだけ助けてあげたい』というの、いつも変わらぬ親の気持ちでしょうが、何をしてあげられるのかつかみにくいのが、十六歳の親と子の関係である気がします」という言葉は、自分では気がつかないところだったのではつとさせられた。

自分の中では、家族の関係性はこれまでと変わっていないと思つていたのに、親はそんな風に考えているのかと思つた。反抗してしまうこともあつたけど、いつも学校の送迎をしてくれたり、お弁当を作ってくれたりする母と、高校生になつてからも親としての意見を押しつけてくる父。わかつていながらも、感謝とイ

ライラの葛藤を繰り返してきたが、この本を読んだことで、少し自分も見直さなければならぬことがあるのだと思つた。

高校生活にもまだ慣れていないので友人関係で上手くいかないことがあつたり、やりたかつた部活動でも理想と現実との違いに何度も悩んだりした。しかし、どんな大人もこんな十六歳を乗り越えて大人になれたのだと思つたら、少し期待したいこともできた。

この本の中の藤原和博さんのように、友人に恵まれた環境と言えるような十六歳を過ごしたい。新学期の前に、まず友達との距離をもつと縮めて、相手のことをもつと知り、また自分のことももつと知ってもらいたいと考えている。何かあつた時に自分のことをわかつてくれている友達がいることは、自分にとって励みになると思うからだ。私は人と話すことは好きだが、相手との距離を近づけようとすると上手くいかないことがこれまでも多くあり、その度に母に愚痴を言つてきた。特に、受験の時にはよく喧嘩もした。しかしいつも応援してくれているのは家族

だということにも気づいていた。この本に出てくる、「十六歳の親と子の間には」という言葉は、自分にとっては近すぎて気づかないことに気づかせてくれる部分あつたなと思つた。

世の中には、大人になる十六歳のころは、悩みだらけで学校にさえ行きたくなくなる人も多いのだと思う。しかし、自分にとつては、親との距離感のおかげで、上手く気持ちを切り替えられていると思えることがある。それは、嫌な自分と現実の間で葛藤がある時には、必ず家族がそこにいるということだ。本当は一人になりたい。でも不安。そんな時の母の距離感自分にとって大事である。

この先の高校生活で、またいつ悩んだり落ち込んだりすることがあるかわからないが、挑戦しようと思ふこともある。この本には、吉野直子さんの「親に内緒でやってみたいと思うことに挑戦していた」という言葉が出てきたが、大げさでもそのぐらゐの気持ちで何かに挑戦しようと思ふ今の自分のようにも思えた。部活動ではバレーボールをやっている

けど、全然違うものにもいつか挑戦できる自分でもいたい。

この本のおかげで、十六歳の自分はどうな一年を過ごすか、いや、過ぎたいかを少し考えることができた。今、目の前のやるべき高校生活と、高校生活以外の自力で選んだことに自信を持ち、そして、いつか年を取つて十六歳の頃を振り返つたときに、「こんな自信の無い自分も楽しく高校生活を送つていた」と言えるように有意義に過ごしたい。

読んだ本

署名『十六歳親と子の間には』

著者 平田 オリザ